

書 評



『子どもが教えてくれたこと』

広木 克行著

北水/教育史料出版会

定価1545円 296頁

『飛び出せ!!子どもコープ』

生協運動の未来を拓く

木下かよ子・子どもたちの生協運動研究会編著

定価1500円 207頁 コープ出版

増山 均(日本福祉大学教授)

21世紀を目前にして、今、日本社会はかつてない子産み・子育ての危機に直面している。

少子化による子どもの数そのものの減少も深刻な問題だが、生まれた子どもを一人前の社会的主体に育て上げることのむずかしさも、かつてなくひろがっている。

物質的には豊かで、便利で、高校や大学への進学率も高いレベルに達しているにもかかわらず、子育てと教育に〈ゆとり〉と〈楽しさ〉を実感できずに、〈あせり〉と〈不安〉を感じさせられる毎日である。経済大国ニッポンの今日の子育てと教育を一言で形容すれば、〈不安と競争の子育て・教育〉の時代と言えるであろう。

経済的価値の追求を第一にした、24時間型社会ニッポンでの勤労者家族の生活と地域社会の人間関係は、ますます希薄になり、生活圈文化が空洞化している。能力主義的競争と管理主義に貫かれた学校と、学校教育そのものをも左右するほどに肥大化した教育産業は、家庭の子育てをさらにあせりと競争の中にひきづり込んでいく。わが子のためによかれと思ってとりくんだ子育てが、予想もしない子どもの育ち方を生み出す恐しい時代である。

〈孤独と競争〉を脱して、ゆとりや楽しさを感じられる〈安心と協同の子育て・教育〉の道をさぐり当てるにはどうしたらよいか。それが今日的基本テーマである。このテーマに対して、広木克行著『子どもが教えてくれたこと』(教育史料

出版会)と『飛び出せ!!子どもコープ』(木下かよ子・子どもたちの生協運動研究会編著、コープ出版)は、重要なヒントを与えてくれる好著である。

広木氏の著書は、氏が長年かかわって来られた登校拒否の子どもたちと父母への相談・支援活動の中から得た教訓をわかりやすくまとめたものである。特にこの著が作られるプロセスに、氏の講演を聞いて感動した母親たちのグループ北水(株式会社)のなみなみならぬ熱意があり、悩み深い子どもたちの心と母親・父親の想いに手のとどく暖かいメッセージの書となっている点が注目される。

広木氏の基本姿勢は明確である。それは、登校拒否・不登校の子どもたちを特別視するのではなく、現代日本のすべての子どもたちの自立への悩み・苦しみの問題としてとらえ、親が変わり、教師が変わり、教育行政と社会のあり方が変革されるべきことを主張している。

「仮の自分、で生きることを余儀なくされた子どもたちが登校拒否によって発しているメッセージは「人間として認められたいという子どもたちの願いが、半端なものではなく、全身全霊をかけた命がけの願いだ」という。子どもたちが、「自分らしい自分、をとりもどすためには、待つこと、対話すること、信じることへの努力を、親自身が自己変革の課題としてとりくみ、安心して寄りかかれる親となって、人間信頼、自己信頼をとりもどせる関係を築くことにあるという。

子どもたちを今ある姿のまま受け入れ、「良い所を伸ばすことで、弱点を小さくしていく」ことが、子育ての極意、であるという考え方に至る、直接出会った子どもたち、大学生たちとの具体的な交流を通しての説明は説得力がある。

広木氏の著書の主眼は、子どもの心、願い、メッセージをどう受け止め、親や教師はどのようなかかわり方をすればよいのかという点にあるので、必ずしも十分に、その背景にある「学校病理」「社会病理」について分析されてはいないが、親と子を支配している学校価値観(能力主義的競争)を相対化する視点は説得力をもって示されている。

ただ欲を言えば、子どもたちの居場所づくりだけでなく、子どもや青年の地域に根ざした自治活動や社会参加のとりくみも紹介されるとよかったと思う。また父母たちの子育てのネットワークや協同のとりくみとの関連性が語られると、〈安心と協同の子育て・教育〉への展望がよりひらけるものとなったと思う。

木下かよ子・子どもたちの生協運動研究会による『飛び出せ!!子どもコープ』は、広木氏の著書の視点を、よりひろい実践的フィールドにすえ直す方向を示唆するものと言える。

大資本による熾烈な経済競争の中で、日本の生活協同組合が「安全で品質のよい商品を手に入れたい」という組合員の願いに支えられて、全国的な発展をとげてきたことは、食と暮らしに対する〈安心と協同〉の運動の成果として注目すべきことである。その生協が、子育て、の〈安心と協同〉への願いを組織化し実現していこうという試みが、子どもコープの提起である。

すでに戦前の消費組合時代から、子育てへの注目がなされていたが、戦後の生協運動の中では必ずしもその点は発展してこなかった。しかし、暮らしと子育ては、特に生協にかかわる母親たちにとっては車の両輪とも言える願いであり、各地の生協で子どものための活動が展開されてきている。

『飛び出せ!!子どもコープ』の第一部には、「ちばコープ」「名古屋勤労市民生協」「名古屋市みな

と医療生協」「コープさっぽろ」「コープこうべ」「山形県鶴岡生協」「愛知県東知多農協」の、子どもむけのとりくみが紹介されている。第二部、第三部には、それらの実践に対する意義づけが、佐藤広和氏(三重大学)をはじめ研究会メンバーによってなされている。藤沢和恵氏(中京女子工業)、小川雄二氏(名古屋短期大学)は、食の教育、食の生活能力の問題として、渡辺正氏(愛知大学)は環境教育の問題として、近藤正春氏は教育協同組合への展望の問題として、生協が子育て問題に本格的にとりくみ子どもコープ、を育て上げていくことの今日的意義が主張されている。

登校拒否の克服の問題とかかわって広木氏の著書が指摘しているように、能力主義競争ときびしい管理主義に貫かれた学校教育の歪みを克服するために、学校外に豊かな子育ての場、安心と協同の原理にもとづく子どもの居場所と活躍の場所がつくられることは、大きな意味をもつ。特に、学校的価値に支配された親と子が、内面にまでしみついたその価値観を払拭して、「学校を休む権利」(広木)を確信をもって主張できるためには、学校に代る学びと育ちの場が多様に存在しているという実績が必要である。『飛び出せ!!子どもコープ』の第一部に紹介した諸実践は、まだまだ初歩的ではあるが、競争と管理に支配された学校とは異なる学びと育ちを保障するとりくみであることは間違いない。

生協が子どもコープ、の組織化に本格的にとりくむことへの提案は、私も大賛成であるけれども、生協のとりくみに対しては、次の点に特に力を入れて欲しいと思う。

子どもコープ、の〈子ども〉は、主として幼児と小学生が対象に考えられているようだが、中学生さらには高校生の年代にこそ、本格的にコープ(協同)のとりくみが必要ではないかと思う。消費者として利潤追求のターゲットにされ、さらには低賃金アルバイトとして収奪されている日本の青少年を、消費・流通・生産の主人公として社会参加をうながすとりくみが企画できないのか。

今日の日本の青少年には、単なる参加体験にと